

No.22

博物館報

百武・久米・岡田三人展特集



「画室」 百武兼行作 1881年頃 油彩 画布 46×55.5cm

百武兼行がイタリア滞在中に描いたものと思われる。明治13年から同15年までのイタリア時代には、百武は公務の傍ら、ローマで国立美術学校名誉教授、チエザーレ・マッカリについて画技を深めている。

上品な室内、その中央に画架が立てられ、画家と思われる男が楽器を手にし、その側でモデル風の着衣の女性が画家の背後から楽譜に視線を落している。つまり、この絵は、画家が描きかけの風景の画題をますために、小憩の間に似合いの雰囲気室内に奏でている図なのであろう。傍らの女性は、百武の画面にしばしば登場する女性である。あるいはこの女性は画家の美の寓意としてそこに立っているのか。

女性の姿態以外には殆んど動きを感じさせない静かで落ち着いた室内の様子が、安定した構図の中にまとめられている。イタリア時代の佳作である。

目次	表紙解説	1	出品物紹介(久米桂一郎)	5・6
	三人展開催要項	2	出品物紹介(岡田三郎助)	7
	出品物紹介(百武兼行)	3・4	博物館日誌、行事お知らせ	8

百武・久米・岡田 三人展開催要項

- 名称 百武、久米、岡田三人展
■主旨 百武兼行(1843~1884)、久米桂一郎(1866~1934)、岡田三郎助(1869~1939)の三人は、ともに佐賀県出身の洋画家である。

百武は、明治初期洋画界の先覚者として、久米は黒田清輝とともにフランス外光派の紹介と東京美術学校西洋画科の創設以来の教授として、また岡田は文展の中心的存在として、それぞれに近代日本美術史上重要な役割を果たしており、すでに三人の業績は高く評価されている。

しかし、これまで三人の作品を一堂に展観する機会に恵まれず、三人のかかわり方と個々の画歴を体系的に窺うことができなかった。

今回、百武、久米、岡田三人の代表的遺作を、新発見資料をも含めて約150点ほどを紹介し、近代日本美術史上の三人の役割をあらためて見直すとともに、広く一般の観覧に供する。

- 主催 佐賀県立博物館
■会場 佐賀市内1丁目15番23号 佐賀県立博物館
■会期 昭和49年9月21日~10月23日

・展示内容

百武、久米、岡田三人の遺作のうち、油彩、水彩、パステル、デッサン及び参考資料を含め、総点数約150点を、県立博物館の1~3号展示室に展示し、会期中出品物の入替えも行う。

・講演会の開催

10月5日 13時30分~15時30分

九州芸術工科大学教授 岸田 勉氏
東京国立文化財研究所 陰里鉄郎氏

※演題未定

・図録等の発行

展示資料に関する図録および目録等を発行する。



百武兼行 (1842~1884)



久米桂一郎 (1866~1934)



岡田三郎助 (1869~1939)

● 出品物紹介 — 百武兼行 (1842~1884)

百武兼行は天保13年6月7日、佐賀藩士百武兼貞（作十）の次男として、現在の佐賀市片田江に生まれ、幼名を安太郎といった。

父兼貞は、幕末から明治にかけて、鍋島藩の京都留守居や有田皿山代官、有田郡令などをつとめた人である。

兼行の青年時代は定かでないが、9歳の時、のちの佐賀藩最後の藩主鍋島直大侯の御相手役に選ばれて以来、終生侯の身辺に仕えている。また、幼時古川松根について和漢の学の他、書画をも学び、のちには英語を修め経済学を得意としたと伝えられる。

明治4年から同15年までに直大侯に随って三度にわたって渡欧し、公務のかたわら、油絵に興味を示しロンドンではリチャードソンに、パリではレオン・ボンナに、ローマではチェザーレ・マッカリについて画技を深めた。15年に帰国後、農商務省商工局次長をつとめ前途を囑望されたが、途中病を得て、帰佐し、同17年42歳の若さで郷里の地に没した。

日本近代洋画史上、最も早い先駆者の一人である。

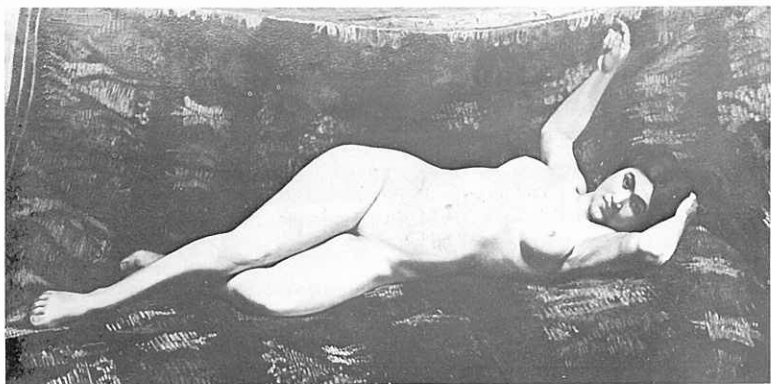
挿絵の「臥裸婦」は、百武の代表作の一つである。

対角線構図上に横たわった裸婦は、きわめて力強く動的な表現で処理されている。パリ時代の師ボンナが、スペインのバロック絵画に傾倒したことから、その影響を強く受けたバロック調の作例の一つといえよう。

「朗（サエ）姫」図は、イタリア渡航直前神戸で描いたものであり、「風景」は病氣療養中、川上から天山を描いたものである。前者は丁寧な仕上げの中に百武の素描力の確かさが窺えるし、後者には伸びのある筆触の内に彼のとらわれない視点を知ることができよう。



朗姫像 1880年 油彩、麻布 50×40cm



臥裸像 油彩 麻布 97×187 (石橋美術館蔵)



臥困兵士図(下図) 1882年
油彩 紙 25×19cm



天山風景 油彩 麻布 38×45.5cm

● 出品物紹介 — 久米桂一郎 (1866~1934)

久米桂一郎は、慶応2年8月8日、佐賀藩士で後のわが国近代史学の祖、久米邦武の長子として現在の佐賀市八幡小路に生まれた。

9歳の時上京し、16歳で、第2回内国勲業博覧会に出品された油絵に接し、洋画研究の念を起した。藤雅三について洋画を学んだ後、明治19年に渡仏し、当時フランス官展派の中ですでに名をなしていた外光派の画家ラファエル・コランの門に入り、同26年に帰国するまで黒田清輝とともに同門に学んでいる。帰国後は、コラン流の明るい彩色による外光表現を伝え、当時の画壇に新風をもたらすとともに、白馬会結成、東京美術学校西洋画科に創設当初から加わるなど、以後の洋画界における主流の位置を占めていく。

その間、各種の博覧会、展覧会等の審査委員をつとめるかたわら、帝国美術院幹事として活躍したが、晩年は制作は少なく、むしろ美術教育者としての功績が大きかった。

昭和9年7月27日、68歳で没した。

挿絵の「林檎拾い」と「フランス風景」はいつでもフランス留学中の作品であり、帰国後、黒田の作品とともに明治美術会展等を通して当時の画壇に衝撃を与えたものである。しっかりした構図の中での柔かい筆致による明るい彩色は、コラン流のもので、明治美術会系の作家たちによる暗褐色を基調にした画面とは基本的な違いを見せている。

久米の初期の代表作である。

「秋景」は帰国後間もなく、黒田と京都に遊んだのち生まれた作品である。点描風の筆触が目につく他、平明な画面の中に日本的な情調を盛り込んでいるところに、滞欧作との違いが見られて興味深い。



林檎拾い 1891年 油彩、麻布 115×88cm



フランス風景 1891年 油彩、麻布 32×41.5cm



秋景 1895年 油彩、麻布 98×71cm

● 出品物紹介 — 岡田三郎助 (1869～1939)

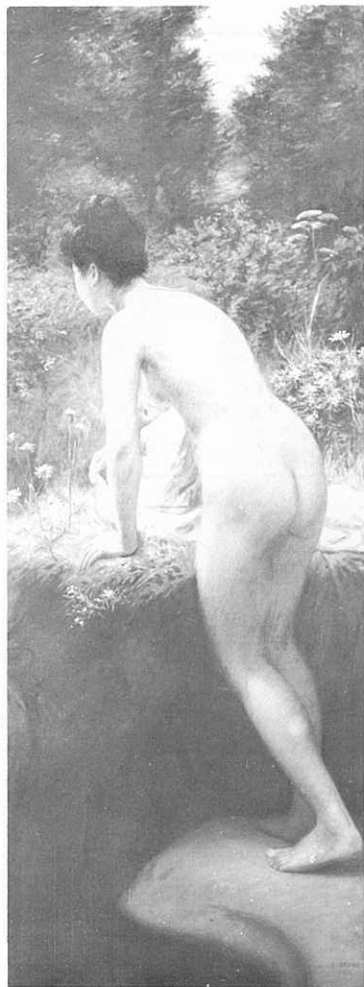
岡田三郎助は、明治2年1月12日、佐賀藩士石尾孝基四男として、現在の佐賀市八幡小路に生まれた。幼名を石尾芳三郎といい、のち岡田正蔵の養嗣子となり岡田姓を名乗った。

幼時、東京の鍋島侯邸内に寄寓しており、その時邸内の百武の油絵を見て洋画家を志したと自ら述懐している。

はじめ曾山幸彦の門に入り、明治美術会に属したが、黒田、久米帰国後はその画風を慕い白馬会創設に参加した。明治30年、文部省留学生としてフランスに留学し、ラファエル・コランの門に入った。35年帰国後東京美術学校教授に任じられ、以後洋画壇の中心的作家として活躍、とくに文展、帝展等、主に官展を通して果たした役割はきわめて大きい。また、美校の他、明治45年には藤島武二本郷絵画研究所を設立し、多くの後輩を育てた。帝国美術員会員、帝室技芸員等をつとめ、昭和12年には第1回文化勲章を受けた。

画風は、コラン流の柔かい筆致による婦人像から出発したが、さらに裝飾的要素を加えた独自の画面を追求し、風景画の中には量感に富んだマチュールも見える。

「水浴の前」はコラン流の筆法を残した佳作で、縦長の画面に優雅な裸婦をとり入れている。「若き娘の顔」は彼の婦人像が、伝統的な日本情緒をもくみ入れるようになる作例である。「大隈伯夫人像」になると、背景の金屏風の処理等に、伝統的な裝飾性をとり入れた厳格な平面構成による人物画の新境地が見える。



水浴の前 1916年 油彩、画布 200×76cm
(石橋美術館蔵)



若き娘の顔 1913年 油彩、画布 41×31cm
(佐賀大学蔵)



大隈侯夫人像 1909年 油彩、画布 40×51.6cm
(早稲田大学蔵)

● 博物館日誌

6月22日 「古伊万里展」開場式、池田知事、瀬戸口教育長、東京大学教授三上次男氏ほか多数来館	8月2日 博物館協議会（応接室）
6月23日 「古伊万里展」一般開場 3号・大展示室 「古伊万里展」講演会（大展示室） 演題 古伊万里の世界 講師 県文化財専門委員 永竹威氏	8月4日 「松本弘二遺作展」終了
6月30日 鍋島直紹氏「古伊万里展」観覧のため来館 唐津宗偏流青年部40名茶室見学	8月10日 「NHK放送のあゆみ展」開場式、池田知事、宮田佐賀市長、瀬戸口教育長、梅村NHK佐賀放送局長、久松NHK放送博物館副館長ほか多数来館
7月1日 人事異動	8月11日 「NHK放送のあゆみ展」一般開場（大展示室）
7月4日 広島県知事来館 佐賀市赤松町、西岡三郎氏から「蓄音機」「仕込み杖」の寄贈を受ける	8月15日 NHK総合テレビ「こんばんわ九州」で「NHK放送のあゆみ展」放映
7月7日 「古伊万里展」終了（総観覧者数11,149名）	8月19日 国学院大学教授樋口清之氏来館
7月13日 「肥前名刀展」展示協力委員会（応接室）	8月20日 「NHK放送のあゆみ展」終了（総観覧者数20,353名）
7月16日 共立女子大学生東由紀子氏、博物館学実習のため来館（7月28日まで）	8月24日 第16回研究講座 演題 ヨーロッパにおける肥前陶磁 一主として東ドイツドレスデン美術館調査について 講師 県文化財専門委員 永竹威氏
7月20日 「松本弘二遺作展」開場（大展示室）	

● 行事お知らせ

修学旅行の計画に博物館の見学を折込んでください。

	常 設	展 覧	
佐賀県の歴史と文化展	12月7日～3月31日	1・2・3号展示室	月 曜 休 館

展 覧 会 名	会 期	会 場	備 考
東光会展	9月7日～9月16日	1・2・3号展示室	会期中無休
理科作品展	9月14日～9月25日	大・中展示室	〃
岡田・久米・百武三人展	9月21日～10月23日	1・2・3号展示室	〃
第24回佐賀県美術展	11月2日～11月10日	1・2・3号・大・中展示室	〃
松方コレクション展	11月16日～12月1日	1・2・3号・大・中展示室	〃
佐賀県高等学校美術展	12月18日～12月22日	大 展 示 室	〃
新遺跡資料展	50年1月25日～2月23日	大 展 示 室	常設展と併設・月曜休館
肥前名刀展	3月2日～3月23日	大 展 示 室	会期中無休

◎職員異動（7月1日付）

退職 副館長 藤光辰次
 転出 総務課長 納富武一（九州横断自動車道用地事務所総務課長へ）
 総務課庶務係主事 小柳武久（漁政課）
 転入 副館長 楠田一次（県立図書館副館長から）
 総務課長 池田満穂（援護課庶務係長から）

博物館報 第 22 号
 発行年月日 昭和 49 年 9 月 1 日
 編 集 大 園 弘
 発 行 佐賀市城内一丁目15～23
 佐賀県立博物館
 印 刷 合資会社 音成印刷所